

がい ぶ
艾 蕪 覚 え 書

中 田 喜 勝

A NOTE on “Ai Wu”

YOSHIKATSU NAKATA

ま え が き

艾蕪に初めて遇う機会に恵まれたのは、1980年4月15日（火）の午後六時十分ごろであった。その時、訪日作家代表团（团长・巴金）の一行12名はグランドホテル（長崎市万歳町）のロビーで、テレビのニュースを看ていた。唐代の成都の古地図を搜しているのだがと言うと、傍の椅子にいた敖德斯爾（作家協会内蒙分会主席）がわざわざ成都出身の艾蕪を紹介してくださった。

艾蕪は今年、72歳とは見えないほど元気で、すらりとした長身は瀟洒な感じさえした。大きな眼と筋の通った鼻は、それぞれ感受性の豊かさと意志の強さを示していた。それに比較的厚目の唇は愛情の深さをも表わしていた。若い頃も颯爽とした個性的な風貌であったに違いないと感じた。現に後で分かったのだが、「艾蕪短篇小説選」（人民文学出版社・1978年北京）の冒頭に掲載された作者像の写真は全くその通りであった。

翌16日、「豊饒な原野」（四川人民出版社・1979）という中篇小説の贈呈を人に託してあった。帰国後は更に「社会科学研究」・「四川文学」などを遥か成都から郵送されるというような好意さえ示された。

そこで、艾蕪というこの現代作家の経歴や作品について非常に関心を持つに至った。資料を調べているうちに、彼について一文を草したい衝動に駆られてしまった。やはり彼の「人と為り」がそのようにさせたのである。彼の経歴や作品の内容が次第に判然となるにつれて、私の興奮は高まっていったのである。特に困難を突破する強靱な意志と、一貫して大衆の立場に立って書くという思想性とは、大いに私を鼓舞してくれるのである。

本文は艾蕪の経歴を紹介し、更にその初期の短篇小説の中から比較的短かい

一篇を訳出して参考に供するものである。

① 艾蕪の年譜

- 1908年(明41) 四川省新繁県に生まれる。
- 1919々(大8) 五四運動起こる。「学生潮」・「新青年」・「少年中国」を愛読し、啓蒙される。口語体で文章を書くことに喜びを感じ、また蔡元培の「勞工神聖」の思想に深い影響を受ける。
- 1921々(大10) 父は小学校教師で、月給八元の薄給であったが、彼は向学心に燃え、すべて公費で勉学できる成都の省立第一師範学校に入学する。
- 1925々(大14) 同校四年を修了し、成都を去る。犍爲を通り、雲南省の昭通を経て省都の昆明にこの年の秋に到着する。宿屋に泊ったが、無一文のため、所持していた書物を売りに行き、本屋の主人の紹介で、赤十字社の雑役夫兼受付の仕事に就く。夜は英人の経営する夜学で英語を学ぶ。「雲波」という昆明の同人雑誌に「流星」と題する口語詩を投稿し、同人と交際する。約一年半、このような生活を続ける。
- 1927々(昭2) 旧正月直前に赤十字社を退職し、易門県で義務学校の教師として一ヶ月余りを過ごす。
3月、昆明からビルマへ向けて出発する。昆明に政変があった。騰越から国境を越えバモーに到着する。しかし、バモーから二日、国境から一日半行程の「茅草地」というところに後戻りし、やす宿の雑役夫として五ヶ月を過ごす。
9月25日朝、バモーから乗船し、イラワザ河を下り、同日午後五時ごろ、カターに着く。汽車に乗換え、ダバを経てマンガレーに翌26日午後四時ごろ着き、ラングーンへ向かう。その後、約3年半、ビルマに滞在する。
ラングーンでも生活に窮したが、同宿の雲南人がある僧侶を紹介し、その僧は彼を「ラングーン日報」(華僑紙)に紹介したりして援助する。最初の短篇小説「老憨人」を同誌に投稿し、稿料を得たりする。
- 1930々(昭5) 12月22日、ビルマ農民の反英闘争起こる。
- 1931々(昭6) 年頭、ラングーン監獄に政治犯として収監される。

- 春、国外追放となり、ラングーンから乗船し上海へ向かう。帰国後、上海の北四川路で偶然、沙汀に会う。沙汀の家に同居し、「左連」に加入する。
- 11月末、沙汀と連名（ローマ字で表記）で、魯迅へ書簡を發し、創作上の指導を請う。
- 1932年(昭7) 年末、「人生哲学的一課」を發表して注目を浴びる。
- 1933ㄨ(昭8) 3月3日、上海の紡織工場の入口で私服警官に勞働者と共に逮捕され、上海公安局に二ヶ月拘留された後、蘇州第三監獄に送られる。
- 9月27日、証拠不十分なため、釈放されて出獄する。この時、魯迅が弁護料として五十元を支払い、援助していた。
- 1935ㄨ(昭10) 12月、処女作集「南行記」が出版される。
- 1936ㄨ(昭11) 11月、「夜景」が出版される。この年、湖南省出身の王姓の婦人と結婚する。艾蕪時に28歳。
- 1937ㄨ(昭12) 日中戦争勃發。10月、上海を脱出、武漢にしばらく滞在後、夫人の郷里の湖南省寧遠県で、夫人と共に女学校教師を半年勤める。
- 1939ㄨ(昭14) 春、桂林に到着。5年余り桂林に住む。この間、中学教師を半年勤める。
- 1944ㄨ(昭19) 夏、日本軍の桂林進攻のため、四人の子どもを抱え、三ヶ月もかかって重慶にたどりつく。
- 1946ㄨ(昭21) 陶行知が主幹していた社会大学（夜学）の文学部で半年講義をする。
- 1948ㄨ(昭23) 秋以来、重慶大学国文科の教壇に立つ。
- 1949ㄨ(昭24) 10月1日、中華人民共和国が成立する。重慶解放後、約1年間、主任教授を勤める。「西南文連」の重要な責任者となる。
- 1951ㄨ(昭26) 重慶市人民政府委員兼文化局長に任ぜらる。重慶市文学芸術工作者連合会副主席となる。
- 1952ㄨ(昭27) 春、中国全国文学芸術工作者連合会が文芸工作者を組織し、工場や農村へ派遣した時、彼は鞍山の製鉄工場へ行き、翌年夏まで仕事に従事する。
- 1954ㄨ(昭29) 四川省からの全国人民代表に選出される。
- 1957ㄨ(昭32) 秋、ソ連へ3ヶ月旅行し、その旅行記を「欧行記」と題して

1959年に出版する。

1966年(昭41) 5月、文化大革命が発動され、爾後、消息不明となる。

1973々(昭48) 5月31日、香港の「新晚報」が彼は健在で、四川省に帰っていることを報道する。

1980々(昭55) 訪日作家代表团(团长・巴金)の一員として4月上旬から中旬にかけ日本を訪問する。

上記の年譜は「目加田誠博士還暦記念・中国学論集」(昭39、大安)所収の「艾蕪伝」(吉田幸夫—北九州大学教授)の記事及び「中国現代六百作家小伝」(李立明・波文書局 1977)に基づいて作成したものである。(1980々の条は事実に即して附記した。)

また、艾蕪自身が自己を語っているものとしては、小説集の序・題記および「我的青年時代」などがある。「艾蕪短篇小説集」(人民文学出版社・1953. 北京)の序文を訳出して紹介する。

序

若い頃、五四運動が私に与えた影響は大きかった。当時、私はまだ小学生で、四川の新繁県の高級小学校に学んでいたので、新聞や雑誌を読む能力は非常に低くて、理解できないところが多かったが、勇気を出し、愚かとも言えるのだが、よく「新潮」・「新青年」及び「少年中国」を読み、分かるところだけ分かればよいと、がむしゃらに読んだ。しかも、理解するとそれがたとえ誤解や生半解であっても、すぐに行動へ移したがった。蔡元培の「労働は神聖なり」という文章を読み終ると、冬休みや夏休みに帰省する時には、服入れや包みを他人には担がせないで、自分で肩に担いで行こうと心からそう望み、二十華里の路を苦勞して歩いたが、何かしらそれが高尚なことでもあるかのように感じた。たとえ、国語の先生が生徒に文語文を作らせても、私は先生の反対にお構いなしに専ら口語文を書いて出した。更に、猛烈な知識慾を起こし、五四運動の発源地の北京へ行って、特に北京大学へ進学したかった。それが可能か否かは別として、その美しい夢はいつまでもかぐわしく、持ち続けた。

私の父は祖父から分与された十畝あまりの畑を全部売ってしまい、専ら初級小学校の教師をして、毎月入る八円で家族を養っていた。だから息子を一人も大学に学ばせることなどできるものではなかった。中学校へもできはしないのだ。幸いにも、公費の成都第一師範学校が私を助けてくれたが、この学校は思っていたほどには私を満足させてくれなかった。なぜなら、そこには新しい潮流の一抹の泡さえも捜し出すことができなかつたからである。しかも、大学で

学ぶという美しい夢も次第に消えて行った。主として、経済上から実に不可能だとはっきりわかったのである。しかし、私の勇氣と茶目気はかえって止めどもなく、大きくなった。私は自分の両腕と努力とを「もとで」にして世間に出て行きたいと考えた。

「労働は神聖なり」というこのような単純な認識から、更にアルバイトしながら学ぶことが可能だと信じて、いわば爽快で愉快的気持ちで、労働者が旧社会の中で遭遇するすべての苦難を平然と受け止めたのであった。私は6年間、家族へ手紙を出さず、級友へも便りをせず、私が出た社会とは縁を切ってしまうと決心し、そして人生の大海原へと入って行った。

1925年の秋、私は雲南の昆明の街に流れ着いて、人生哲学の第一課が始まった。それは最も忘れ難い一課であり、いかなる大学でも教え得ない一課であった。しかし、私はこの一課を文字にする時には、すでに1931年の上海に居たのである。1925年の当時には私は別に文学を仕事にしようとは考えていず、ただ人を生活できないようにするあの社会の中で、頑張って生活していき、更に働き、読書し、学んで、社会を一つの大学にしようと考えていた。

私は雲南省の昆明に在る赤十字社で、一年半雑役をしたことがある。雲南西部の連なる山の中で、ある時期、流浪したこともある。ビルマと雲南の国境の山頭族が住む山——一般の中国人はそれを野人山と呼んでいた——の中で、道端に中国人が開いていた「馬店」で、五ヶ月、馬糞の掃除をしたこともある。ビルマのラングーンでは中国の和尚の手助けをして、ある時期、飯を炊いたことがある。また、マレーとシンガポールに流浪したこともあった。私が最初に書いた材料はこのような環境や生活の中から汲み取って来たのである。

この集に選ばれた短篇はいずれも1931年以後に書きあげたものである。しかし、1930年以前流浪の期間にも暇を盗んで、新詩と小説とを書いたことがある。昆明の文芸出版物に作品を発表したことがある。ラングーンで生活が苦しい時にも華僑の新聞の副刊に投稿して、生計を立てた時期もある。これも、五四運動の影響によるもので、白話文学を深く愛していて、たとえ書けない条件の下でも耐えて書かざるを得なかったのである。私は憶えている。山頭族の住む山中で、五ヶ月の苦しい仕事に従事し、ビルマのパモー平原に下り、イラワヂ河の河辺の或る勞務者のやす宿に泊っていた時、夜、一本のローソクを点し、ベッドの上に腹這いになって、新詩を心楽しく書いたのを。それは流浪の時期、最も忘れ難い一夜であり、最も楽しい一夜でもあった。

若い頃は実に無窮無尽の勇氣を持っていた。現在でもなおそのような勇氣を

保持し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想とをよく学び、この偉大な毛沢東の時代を歓び小躍りして迎えている。同時に、人生の大海原に勇敢に突入して、未曾有の新しい生活を体験し、私たちの偉大な、そして新中国を建設している労働大衆を文芸で努めて表現しようと思っている。

1953年6月10日 於 鞍山

② 艾蕪の文学への開眼

「四川文学」（四川人民出版社・1980. 1）の69頁から71頁に彼の「墨水瓶挂在頸子上写作的」（インク瓶を首にかけて書いたのだ）と題する一文がある。これは彼の文学への開眼を知る上で、一つの資料と考えられる。所要と思われる後半部を原文に即しすべて訳出してみる。

1927年夏、家を離れて漂泊し、雲南の省都に到着した。昆明の赤十字社で雑役をしたが、初めはなお哲学の研究をしようと張切っていた。その後、書物を多く買う資金も無かったし、直面している退屈な生活の為に、高尚な研究をすることは容易ではなかったので放棄せざるを得ず、また文学の道に後戻りした。同時に、投稿する関係で、幾人かの文学研究の青年と接触した。例えば、「雲波社」の人たちで、そのため新詩を更に努力して作った。その内容といえれば一つは抒情的なもので、悲哀を吐露し、一つは唯美的な、私自身の心を酔わせるものであった。ここに記憶しているものを一首書き出してみよう。

低回在湖浜	湖畔をさまよへば
天空的星晶瑩	夜空のキラメク星も
水裏的星凄清	水面の淋しき星影も
都睇着我眼波盈盈。	涙ぐむ我に光そそぐ。
忽的一閃流晶	ふと、流れ星の一閃すれば
水裏的向我湧進	水のは我へと突き上がり
天上的向我馳奔	空のは我へと馳せ下る
呵呵、我要捧着双星	あゝ、吾れ二つの星を捧げ
光燦地飛騰！	燦然といざ飛翔せむ！

身分は他人に仕えるつまらぬ仕事であるから、どうして高くなり得ようか。ただ“燦然と飛翔せん”と幻想して暫時自己満足させたに過ぎないのだ。当時は、文学内容の傾向が疑いも無く「創造社」の影響を受けていた。更に、夜の間は

英語の学習会へ行って英語を補習し、またしきりに外国の英雄や美人の物語を読んだ。だから、現実を文学に反映させるというこの企図は終始なかった。それで、当時従事した文芸の写作は私に生のあくどさを全く感じさせることはできず、ただ漫然と「ものぐさ」でしていた。その上、環境が日毎に悪くなり、ついに自殺という馬鹿げたことさえも試みてみようと考えたりした。その後、どうにもしようがなくなって、漂泊の旅へとまた出たのである。

四川から雲南へ、雲南からビルマへ、道中ずっと本を持ち、紙とペンを持ちそして細い麻ひもで首に吊したインキ瓶を持っていた。小さな宿屋のランプの灯の下や、樹蔭に蔽われた山の坂道で、一人の人間の寂しさを打消すために小さなノートを膝頭に置き、見聞いたことや断片的な想いを書いた。それは手から手へと書かれてはなくなって行った。こんなことに私は書くことの楽しみを得たので、インク瓶と紙やペンはいつも一日たりとも手離したことがなかった。たとえ他人のために荷物を担いでも、それらをその人の竹籠の中にちゃんと入れさせてもらったりもした。

私の包みの中には終始、文学書を入れたことはなく、かえって梁漱溟の「東西文化及其哲学」・胡適之の「中国哲学史大綱」・呉稚暉の「文存」及び幾冊かの経済学関係の書物が三千華里もの道を私に跟着来た。もしも当時、誰かが指導して私に一二冊のすばらしい文学書を持たせて、身近に置き、漂泊しながら研究させたとしても、現在のようには今やならなかったと思うのである。同時に文学への考え方がよくなかったので、文学は一生かけて従事するような代物ではないだろう思い、たとえよい小説があっても、多分当時でも携帯するはずはなかったであろう。

その後、ゴーゴリの「外套」を読んだ。これはビルマの野人山中の茅草地で店の手伝いをしていた時に、雲南の友人黄洛峰が昆明から送ってくれたものである。しかし、私はそれほど嬉しくはなかった。なぜなら、小説の中の主人公はどうであろうと私よりも快適な暮らしをしておると思い、細かに研究する興味を起こさせることができなかった。当時は、文学に対してやはり内容を重視しており、文体や描写に留意してはいなかった。だが、毎日、客への仕事の余暇や馬糞を掃除した後で、依然として小さなノートを膝頭に置き、土の階段や樹蔭で、見たことのある人物を描写したり、面白い方言を書きつけたりした。

五ヶ月あまり働いて、バモーへ急ぎ行ったが、身に稼いだ錢もあり、生活も心配がないので、昼間はあちこち見物してまわり、夜は勞務者だけを泊めているあばら屋に帰って、一本のローソクを頼りに、私の好きな詩作をした。

蹲在掌大的窗辺、 掌ほどの窓辺にうづくまると
 瞧見了江水瀾漫、 豊かな河の流れが見えた
 破楼裏雖是幽暗、 あばらやはほの暗いが
 心靈中却閃有波光片片。 心は波の光のようにキラキラとときめく。

蹲在掌大的窗辺、 掌ほどの窓辺にうづくまると
 瞧見了江水泛濫、 氾濫する河の流れが見えた
 破楼裏雖是黑暗、 あばらやはまっ暗いが
 心靈中却飛有白鷗点点。 心は白い鷗のように点点と飛びかう。

題名は「イラワチ河畔」である。この詩は私の当時の愉快的心情と全く一致している。そのような時にまじめに作ったのは詩であり、散文であった。小説を書いたのはラングーンに到着してから後のことであった。

ラングーンに着いた時には、まさか小説をつくろうとは考えてもいなかった。初めて来たラングーンには、顔見知りはおらず、銭も使い果たし、それに病気も重かったので、店の主人に急いで街頭へ出てもらって、万慧法師から助けられた。病気もよくなると、法師のために雑用をしてあげた。ご飯の煮たきや掃除をしたりして、本を読みながら、同時に詩を作った。だが調子は前よりも悲愴なものになっていた。

回首岷沱の故郷、 ふりむけば岷・沱のふるさと
 淚滴在異国的湖上。 涙は異国の湖畔に滴たる。
 但願將朽的皮囊、 ただ願ふ旅に病む我が身を
 丟在慈母的墓旁； やさしき母の墓前に捨てむことを
 冷寂的幽夜呵、 いと寂しく静かなる夜よ
 化作点点螢光、 ほのかなる螢の光と化して
 減我慈母的淒涼； 我がやさしき母の嘆きをやすめなむ
 芳春來臨呵、 うららなる春の訪れよ
 化作朵朵花香、 芳しき花の香と化して
 讓我慈母好徜徉。 我がやさしき母をそぞろに歩かしめなむ。
 回首岷沱の故郷、 ふりむけば岷・沱のふるさと
 淚滴在異国的湖上。 涙は異国の湖畔に滴たる。

注：岷・沱はいずれも四川省を流れる江の名。

この詩は病氣中に黄金のパコダの下のルイチ湖畔で出来あがったものである。

今にして思えば、当時の心境であったかも知れない。別にそのような悲哀を書き出そうとしたのではなかった。だが、多分、悲しげに書けばそれだけ気晴らしになるだろうということだったにすぎない。なぜなら、以前、私には悲しみを“なぐさみもの”とした時期があったからだ。

万慧法師はサンスクリットを研究する学者で、寺には住まず、人に読書を教えて生計を維持していたが、よく困難を感じると、私は極力仕事を捜して、外に活路を求めたが、いつも何も捜し出すことができなかった。偶然、彼は私が書いたものを見て、言った。君は文章が書けるから華僑新聞社へ投稿してみろと。私は散文一篇を書いて、試みにラングーン日報に送った。編輯部の陳蘭星君は慧師の友人であったので、すぐ先に私へ20ルピーを渡し、つづいて散文を登載してくれた。あの時は1927年の冬であった。それから、私はさらに短篇小説を書いて投稿した。だが、技巧についてあまりにも修練が足りなかったし、しかもなお小説を遊戯と見なしていたので、前後して二三十篇を書いたが、ついに読めるようなものはなかった。

その後、映画館で中国人を侮辱した映画を見たが、終る時に、外国の飛行機が爆撃をする場面で、多くの中国人が殺されたが、私はそばにいた白人やアジア人と一緒になって賞讃の拍手をした。そこで私は初めて、芸術の魔力を深刻に認識し、同時に文芸の重要性がはっきり分かった。だが、私はやはり文学を研究する決心は持っていなかったのである。

上海に帰りついて、北四川路の路上で偶然私の文学研究の友人に出逢った。師範学校時代の同じクラスの同学の沙汀であった。彼は私のそのような経歴を知って、また書きたくなり、私を彼の家へ引張って行って住ませ、朝夕一緒に研究した。それから、やっと文学というこの道を歩く決心をしたのであった。しかし、この決心も動揺があったのである。原因はしばしば投稿が壁にぶつかったからである。その後、「文学月報」に私の「人生哲学の一課」が発表された時に、初めて決意が堅く固まって行ったのである。

(1934年7月、上海生活書店出版、文学一周年紀念特輯、「私と文学」から選ぶ)

この一文の前半には、少年時代から本を読むのが好きであり、叔父の家から借りて読んだりしたことが書かれている。特に成都第一師範学校に入ってから、五四運動の影響があつて、翻訳小説が流行したが、艾蕪は次のような小説に興味深く読んだことを憶えていると云う。すなわち：「新潮」に孫伏園が訳したトルストイの「カアチャスの囚人」・「小説月報」に夏丐尊が訳した国木田独歩

の「女難」、その外に林琴南が訳したデッケンズの「賊史」などである。「女難」の中の盲人には涙が流れたと云う。独歩の作品も読んでいたのである。

要するに艾蕪が文学に開眼した時期は、級友の沙汀と出逢い、「文学月報」に「人生哲学的一課」が発表された頃であると言うことができる。さればこそ、短篇小説集にはよくこの小説が冒頭に置かれているわけである。

勿論、「五四運動」という大きな時の流れがあって、艾蕪に白話文学を志向させたことが、彼の文学活動の基盤となっていることも否定できない。

しかしながら、特に注目すべきことは、艾蕪と魯迅との関係である。艾蕪は沙汀と連名で魯迅に創作上の指導を受けるために、手紙を出しているのである。

③ 艾蕪と魯迅との関係

魯迅の「二心集」（人民文学出版社・1973・北京）の149頁に、「小説の題材に関する通信」と題して、艾蕪・沙汀から魯迅へ宛てた1931年11月29日付の手紙が載せてある。すでに増田渉先生の訳文があるが、引用しないで、敢えて訳出して示す。

L・S先生：

先生のお心をかくも不本意ながら煩わせることは長い間、我慢して参りました。しかし、私たちの心の中に在る先生は、熱心な若者が教を乞うのをいい加減になさるはずは恐らくないことと存じます。かく幾度も思案したあげく、終に突然、私たちの文芸上の——とりわけ短篇小説上の疑問と「ためらい」を先生へ表明致します。

私たちは短篇小説を多く書きました。採りあげた題材は一つは専ら熟知している小資産階級の青年に就いてであり、現代に顕現し潜伏している一般的な弱点を諷刺という芸術手法で表現しました。一つは専ら熟知している下層の人物に就いてであり、——現代の大きな潮流逆まく圏外に在る下積みの人物や生活の重圧下で強烈に生を求める欲望の中にあるぼんやりした反抗の衝動を創作の中に刻みこむ。——このような内容は結局、現代に対して貢献する意義があると言えるかどうか分かりません。私たちは初めは遲疑し、次いで筆を起こすと、又、ためらいます。この点について先生の御指導をお願い致します。と申しますのは、文芸上の努力が目下の時代に対して、精力の無駄使いとなり、少しも意義がないなどは私たちは願っていないからです。

私たちはこの時代の中で、精力を有意義な文芸に傾けたいと決心しています。ここに私たちが当然すべき助力と貢献を表明する次第でありまして、先生が言

われるように少し有名になると、無節操になるようなそんな文士では決してありません。従いまして、目下、先生がもし私たちに御指導を与えたいと願っていらっしゃるれば、その御指導は私たちに一生影響するはずです。

プロ作家の多くの創作を読んだことがあります。私たちは虚構の人物を解放し、革命を起こさせることはどうしても願っていません。逆に熟知している幾人かのモデルをつかまえて、真実らしく描き出すのを好んでおります。このような志向が妥当か否か、確かに充分には理解しておりません。そこで、何度も思案した末に、失礼ですが突然お便りを差上げました。

敬 具

Ts—c. Y. 及び Y—f. T から 十一月廿九日

この手紙の最も重要な点は艾蕪・沙汀の両名が次のようなことを質問し、教示を請うたことである。すなわち：

- ① 熟知している小資産階級の青年をモデルとして、彼らに顕在し又は潜伏している弱点を諷刺するのは、現代に於いて有意義であるか否か。
- ② 熟知した下層の人々をモデルとして、彼らの反抗の衝動を描写するのは、現代において有意義であるか否か。

とこれら二点について質問して、魯迅に教示を請うており、彼らは、虚構の人物が自由の身となって、革命を起こすような創作は好ましいとは考えていないと述べている。

次にローマ字の署名について少し触れておく。先ずなぜ本名の湯道耕（艾蕪）・楊成方（沙汀）と書かないで、ローマ字で書かれたのかという疑問が当然起こる。当時1931年という年は国民党の「左連」の作家たちへの監視や圧迫がきびしかったことが主な理由である。魯迅への通信はその弟の周建人を通じてなされていたという。なお細かいことだが艾蕪の署名には書物によって差異があり、YE. T. とか YB. T. とかになっているものもある。

魯迅は12月25日付で返事を出している。返事が遅くなったのは流行性感冒に罹ったからだと言頭に述べてある。

要点を抜き出して訳出すると次の通りである。

私は挙げられた二つの題材は存在の意義があると思う。第一のは同じ階級でなければ、深くは知ることができず、襲撃を加え、面の皮を引き裂き、その間の事情をあまり知らない者よりも更に有力である。第二のは生活状態に即し、時

代に随って変更され、その後の作家の目に留らないかも知れない。随時、記載して行けば、少なくとも、その時代の記録とはなり得る。従って、現在及び将来に対し、やはり有意義である。たとえ熟知していても必ずしも正確ではないが、その有意義な点を取り出して来て指示すれば、その意義は格別に明白となり、拡大されるが、それは正確な批評家の任務である。

従って、御両名は自分たちが現在書ける題材について、それぞれ筆を動かして書いてよいと思ふ。ただ、創作を豊かで楽しいものにするために、材料の選択は厳密でなければならない。掘り下げは深くなければならぬ。つまらぬ無意味な事で以て一篇を填めてはならない。

と述べ最後に次のように述べている。

要するに、私の意見としては、現在書けるものは何でも書き、時勢に阿諛せず、自ら急変する革命英雄をひたすら作り出して、「革命文学」と自称するには及ばない。しかし、この一点にいやしくも安住して、改革がなければ、自己を沈没させてしまう。——時代への助力や貢献も消滅してしまう。と。

魯迅からの返事を受取った後、艾蕪と沙汀は小説をまた送って、魯迅に教を請うている。艾蕪は書きあげたばかりの「太原船上」と題する小説を送ったところ、魯迅から素朴・誠実であると評価され、彼は非常に鼓舞され感激している。(艾蕪短篇小説選 人民文学出版社・1978・北京の題記)

艾蕪をして文学創作への方向を決定させた「人生哲学的一課」と魯迅の返信との関係はどうか考えてみた。しかし、前者には「1931冬上海にて」とあり、後者は日付が12月25日となっている。わずか6日間で「人生哲学的一課」を艾蕪は書きあげたのだろうか。それとも、魯迅からの返信以前に書きあげたのであろうか。単に「冬」とあるのでいずれであるか分らない。また書き進めていた時に、返信を受取ったことも考えられる。

いずれにしても魯迅からの返信が艾蕪らの生涯にとって忘れ得ない一頁を刻んでいることは間違いない。

次に艾蕪が魯迅から金銭上の援助を受けたことも注目に値することであろう。彼は「艾蕪短篇小説選」(人民文学出版社・1978・北京)の「重版題記」の中で、次のように述べている。その部分を訳出して示す。

私は更に少し述べたい。魯迅先生は私の創作の仕事を指導され、鼓舞激励されたばかりか、生活が苦しい時には、経済面・政治面でも大いに援助をくださった。前にも述べたように1933年の春、上海で国民党の逮捕に遇い、偽公安

局が私を2ヶ月余り拘留し、また蘇州の偽高等法院の第三監獄に4ヶ月余りぶちこまれた。「左連」は私のために史良弁護士に出廷して弁護することを依頼した。魯迅先生は五十元を支出されて、弁護士への費用とされた。このことは単に経済上の援助のみならず、政治上でも魯迅先生の信任を得たことでもあった。私の出獄後、「左連」の同志がこのことを知らせてくれたので、私は早速手紙を出して感謝の気持を表わした。1936年、魯迅先生が逝去されてから、私は追悼文を書き、私を援助されたこの事実を鄭重に提起した。（「光明」半月号に発表し、解放後は、人民文学出版社編「回憶魯迅」にこの文章が収められている。）

④ 左手で敬礼する兵士

「敬礼！」

顔をあげてみると、よごれた軍服を着た負傷兵が一人、正面の机のところで私に直立不動の姿勢で敬礼していた。すると、そばの別の患者——花柳病に罹っている芸者がクスリと笑い、さっと白い絹ハンケチを口に当てた。彼が左手を耳もとに挙げて敬礼したからである。彼の右腕はもう負傷していて、血に汚れた布に包まれ、腫れあがって胸もとに抱かれていた。苦痛に青ざめ、よごれた顔には、田舎者のあの素朴で、間の抜けた感じがまだ残っていた。たぶん、軍隊生活を長くは経験していないのであろう。日焼けした足にこびりついた畑の泥が、まだ落ち切れていないのかも知れない。

私自身はどうだろうか。もしも将校や軍医で、体裁のよい者であつたら、無言で落着きはらった顔をして、彼の敬礼を受けられたかも知れない。しかし、私はこの遠方の省都で、慈善病院の雑役兼受付をしているに過ぎなかった。そんな大げさな軍隊式の敬礼など受けられたものではない。だから、「敬礼！」と彼が叫ぶと、全く赤面して、やり切れない気持になった。

しかし、彼はそんなことにお構いなく、ただもう私に取り入り、少しでも早く治療室へ行こうとし、先を争って番号札をとった。だから、それ以後、毎日先着の患者がいて混雑するようになると、彼は私の面前にさっさとやって来て、例のように左手を耳もとまで挙げた。私はその度ごとに赤面し、そんなに馬鹿丁寧にしなくてもよいと言うと、彼は番号札を手にとり、分かったようになつた。しかし、翌朝九時になると、彼はまたギョッとさせるような姿勢で、私の面前にかめしい姿を現わした。

「貴様って、全く阿呆だ！」

と一言、言っただけだったが、彼には少しも悪意はないのだと思い、少し滑

稽に感じ、微笑しただけであった。

二名の将軍の地盤争奪の大戦闘が、次第に激しくなっているようであった。身に戦闘の傷痕を刻印した灰色の軍服姿が、私の目の前に更に多く見られるようになった。彼らが呼出しを待っている時には、重傷患者は汚れた木製の長椅子に腰掛け、セメントの剝げ落ちた壁に寄りかかり、うつろな眼をして、呻いていた。まるで、世間には苦痛だけが人類を威圧し、それ以外のものは全く存在していないかのようであった。ところが、軽傷患者は少しも痛みを気にかけず、口に半切れの煙草をくわえ、患者の面倒をみている少女や、子どもを治療している女性の方へ、不遠慮に流し目を使ったり、或は、他人の顔や動作に何か面白い種はないかと捜がしていた。みたところ、銃創を身に帯びているのは、花でもつけているかのようで、幸せ一杯という風であった。だから、この左手で敬礼をする奴は、自然と彼らの気晴らしの唯一の目標となったのであった。初め、「敬礼！」といういかめしい声はその場の不思議そうな視線をすべて集めたが、つづいて手が左の耳から、不恰好に下されるや否や、どっと笑い声が爆発した。私は赤面し、その間抜けな役者も顔を赫らめた。

その時、彼の近くにいた一人が、片目をむいてからかった。

「おい！何処で習って来たんだ、そんな礼の仕方を。日本でかい、西洋でかい。」この愚かな役者は慌てたように、すぐに胸もとに吊した右腕をちょっと動かしてみせた。

「ほれ、これで何で持ちあげられるだ。」

相手はなお少しばかり何か言ひたげだったが、我慢し、ただもう軽蔑したように打眺め、口もとを曲げて「チェツ」と一声出すと、同時に手で帽子を頭の後の方へかぶり直し、鼻先をツンと上向けて立去った。それでも割に厚かましい奴もいて、彼の目の前で大声でひやかした。

「フン——全く馬鹿げた敬礼だぜ。紙人形にだってお前は敬礼するんだろ。」

彼は目をパチクリさせながら、少しも相手にせず、医務室の方へ立去った。だが私は、こんな言葉を耳にして、やり切れなくなり、彼が恨めしかった。あんな愚かしい挙動のあふりを受けて、私までもみんなの蔑視の対象になってしまったからだ。

私のことをよく知っている別の負傷兵は、私が顔色を変えたのを見て、そんな言葉が確かに私を傷つけたのを知り、それとなく慰めてくれた。

「全く軍人らしくもない。道端から引張って来た人夫が、そっくり戦線へまぎれこんだようだ。あんな奴を誰が尊敬できるもんか。何も分かっちゃいない。」

次の日、彼はまた相変わらず私に敬礼したので、わざと口もとや顔をふきげんらしくして彼に目をやり、見知らぬ患者に向かい合っているかのように下を向き、その上、尋問でもするような語気で言った。

「名は何だ？」

「呉大経」

「いくつだ？」

「二十八」

答えた声にはひどく驚き慌てた感じがあって、彼は私が立腹しているのを知っていた。顔をあげると、紅潮した瘦せた顔が私の面前に在った。私は自分の方が間違っていたのだと感じて、あいまいに一言、言った。

「今日は患者が多すぎるなあ。」

はっきり言う必要はないが、私のすまない気持を表わすために、「みてみい。わたしは全くやけに忙しくなるんだ。」という意味を伝えるためであった。すると彼は口をもぐもぐさせ、物言いたげだったが、はっきりとは言えない様子で、自分に渡された番号札を受けとると、また姿勢を正し、あの腹立たしい左手を耳もとへ挙げたのである。全く彼は言ってもだめ、罵ってもだめなのだ。私は鼻に皺を寄せ、苦笑しただけであった。

医師の助手の話によると、彼は治療室でも医師にあのように敬礼を二回する。入って来る時と出て行く時に、少しでも敬礼をしなければ、治療までがいい加減にされるとでも思いこんでいるらしいとのことであった。

「実に笑止千万だ。誰が左手の敬礼を喜ぶものですか。」

言い終ると、医師の助手はフーと一息ついて手を振った。

多くの軽傷患者がいたが、中には、傷口が塞がろうとする間に、よく一杯飲み屋へ行って一杯引掛け、翌日また紅く腫らして傷口が裂けたのを医師の面前にさらし、治療期間の延長をする者がいた。私が受付に当たっていた時には、よく知っている患者を幾名か叱ったことがある。

「なぜ自分をそんな風に苦しめるようなことをするのか！」

初めはこんなに答えた。

「兵隊さんは飲むのをとめられはしませんぞ。」

後でうっかり本音を吐いた。

「早く治ってでもみろ。また人殺しの場所へ行くのか。そんな馬鹿じゃないぞ。」

そこで、その後は、彼らの傷口が塞がろうとしているのを知ると、私はからかって言った。

「今晚、一杯やりに行かねばならなくなったぞ。」

「一角、借してくれ！」

相手は早速、銭を求める手を私の鼻先へニヤニヤしながら差し出した。

ところで呉大経は、多分、この間の事情は分かっていないらしかった。毎日、病院の者に気に入られようとし、少しでも早く治癒するのを切望し、敵をやっつけるために再び急ぎ前線へ行きたがっているようであった。

彼の右腕の傷口は日毎によくになり、自由に動かせるようになった。だから、敬礼の際には、ゆっくりと右腕を挙げ、以前左手が代行していた職務を取り戻したのである。しかし、何回かふと忘れてしまって、普通にあの挙げ慣れた左手を使ったものであった。

私は微笑して言った。

「上官を見たら、注意しろよ。その不恰好なやつにな。」

「ハハ、また忘れた！だが大丈夫。上官に会うこともなくなっただ。」

「どうして、お前は兵隊をやめるつもりか。」

「傷が治ったら家に帰らせるって、上官はとっくに許可してくれただ。」

「家へか、それあ、いいじゃないか。」

私は口を衝いてそう言ったが、彼はうつむいてただ一言、

「そうだべ。」

と吐き出しただけであった。それで、私も口をつぐんだ。

最後の全治の日が来ると、彼は嬉しそうに私に言った。

「明日、出発して帰れるようになりました。」

「よかった。おめでとう。」

私は笑顔を上げて答えた。灰色の表門の外へ彼の楽しそうな後姿が消えるまで、私はずっと眺めていた。

三か月ぐらい経ったある日の朝、患者の名札を書いていると、聞き覚えのある沈んだ声があった。

「わしの分も一枚お願いします。」

顔をあげてみると、まさしく呉大経が来ていたのだった。顔付は以前と同じように純朴で正直そうであったが、少し暗い影を宿し、いくらか痩せていた。今度は足に負傷していて、両手は無事である。しかし前のように片手を耳もとに上げるような敬礼はしなくなっていた。こいつめ多分、要領よくなったのだなあーと私は思った。私は登録番号を記入しながら尋ねた。

「どうした。家からまた戦場へ出たのかい。」

「あん畜生め！あん糞たれめが！」

すぐに立腹し顔を赤くして彼は罵った。

「誰のことだねえ。」

「いわずと知れたあん畜生、大隊長が家へは帰らせなかっただ。」

「じゃ、お前はずっと家に帰らずじまいか。」

彼はうなづき、びっこを引きながら治療室の方へ入って行った。

その後、彼は毎日来る時には、以前のように先を争って割り込み、早く受け付けてもらうようなことはしなくなった。ただ憂鬱そうな顔をして、長椅子に腰かけ、静かに待っていた。眼光には力がなく、思いつめている様子で、まるで石像のようであった。偶然、手を挙げる時もあったが、それは汚れた繻帯の上を逼りまわす蠅を追払うためであった。そして人々は彼がまだ生きていたのに気付いただけであった。

医師の助手は呉大経の敬礼に以前は不満を懐いていたが、今や呉大経自身がそんなおごりな動作を取消してしまったので、かえって逆に非難し、こう断定した。

「軍隊が長くなれば、うすのろでも悪者になりますな。」

しかし、私は別に呉大経が悪くなったり、猾くなったのではなく、彼の胸の中には大きな希望がなくなったからだと思った。もしも痛まなければ傷口など潰れ爛れてもかまわないように見えた。

だが、彼の足は終に治癒した。最後の日に私は彼に言った。

「おめでとう。またよくなったぞ。」

彼は口許を動かしただけで、嬉しい様子は見られなかった。続いて私は尋ねた。

「今度こそ、休暇を貰って家に帰れるだろうねえ。」

彼は頭を振り振り、憂鬱そうにうつむき、そして打ちひしがれたように立去った。

私は彼がまた負傷して来るかも知れないと思ったが、何年経っても彼は二度とは姿を見せなかった。彼のことは次第に忘れてしまった。毎日正午過ぎには、この小さな病院の診察室はドアを閉め、私の受け室の事務も終る。すると、それ以外に、患者からワアワアと頼まれる雑役の仕事が始まる。通りへの走り使いや手紙出しなどで、全く昼からずっと休む暇もないように私をしてくれるのである。或日の夕方、狭い通りにはいると、突然、乞食が一人私の目の前に立ちただかかって叫んだ。

「敬礼！」

続いて、物乞いの声色で、

「わたしに銅板一つ、お恵みください。」

耳もとに目をやると、まさしく左手で敬礼しており、声もよく聞き慣れたものだったから、すぐに私は思い出した。驚いて尋ねた。

「お前か、呉大経！」

「さようで——」

「兵隊はやめたのかい。」

「今さら誰がわしを要るもんか。ほれ！」

彼は右腕のところをあごでしゃくると、なんとフワフワの袖だけになっていた。

「じゃ、家に帰れるじゃないか。」

彼は乱れた長髪の頭をうなだれて、答えなかった。

「旅費がないのかい。」

しばらく沈黙の後、彼は切なそうに首を垂れて言った。

「あります。だが帰れなくなってしまいました。」

「なぜ？」

「最後の戦闘が、丁度わしの村でありました。アー」

1934年 春 上海にて

魯迅が艾蕪らへの返信の中で、「随時、記載して行けば、少なくとも、その時代の記録とはなり得る。従って、現在及び将来に対し、やはり有意義である。」と述べているように、この小説も当時の中国社会の一断面を記録したものであって、やはり有意義である。今日中国社会と比較すれば、誠に今昔の感に堪えない。

最後に艾蕪についての評価を訳出紹介して、この覚え書を終ることにする。

「中国現代文学史略」(作家出版社・1955・北京)の中で、その著者の葉丁易は次のように述べている。すなわち：

艾蕪は抗戦前に「南国之夜」・「南行記」そして「夜景」などの短篇小説集を出していて、ビルマの民衆が自発的に反帝国主義の闘争に起ちあがったことを書いたことによって、人々から注目されたが、実は彼の取材範囲は別にただこれらに限られたわけではない。農民・兵士・悪賢い奴などの生活も彼の筆によって表現されている。抗戦の期間中に、作者は更に一歩前進し向上した。彼は後

方の各種の生活形象を描写した短篇小説をたくさん書いた。更に中篇小説の「春天」・「秋收」があり、戦後出版された長篇小説「山野」も書いている。

一般的に言うと、艾蕪の作品はすべてがやはり革命の立場に立っており、革命の観点からその題材と人物とを分析処理しているのである。写作態度も謹厳で懇切である。(以下略)

艾蕪の「一以貫之」の強い意志に感動し、また騰越・マンダレー・ラングーン・シンガポールなど彼の足跡のある処に筆者も戦時中行ったことがあり、懐旧の情を催した次第であった。この一文を艾蕪先生の来崎を記念して、先生へ捧げたいのである。先生のご健康を遥かに祈りつつ。

1980年春 于崎陽

(昭和55年 5月31日受理)